説教20221218サムエル下7：4-17ルカ1：26-38「あなたは私の子となる」

挨拶と言うのは、その取り交わされる場所を支配する霊、スピリットを如実に表していると思いますが、今の日本の仕事場や社交場でも、恐らくごく普通に「お疲れ様」「お疲れさん」という具合に挨拶が取り交わされていることと思います。

このお疲れさん、という挨拶が飛び交う場所には、「お疲れ様の霊」とでも言うべきスピリットが満たされているように思います。そしてこの霊が支配する場所の締めくくりは、お疲れ様会とも言われる忘年会でありましょう。

この「お疲れ様」という挨拶を批判するわけではありませんが、何か見ていますと、あまりに長いにわたって、「お疲れ様」と挨拶し続けた結果、では、もはや、この挨拶が人々のねぎらいの言葉として響いてこなくなったのではないかと思わされます。今の若い世代が忘年会に参加したがらないのは、こういった訳があるのかもしれません。

聖書では、「疲れ」について次の様に語っています。

わたしは嘆き疲れました。夜ごと涙は床に溢れ、寝床は漂うほどです。・・・

叫び続けて疲れ、喉は涸れ／わたしの神を待ち望むあまり目は衰えてしまいました。・・・

主に望みをおく人は新たな力を得／のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。・・・

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

つまり、聖書では、疲れは、主イエスキリストによって癒され、慰められるようにされています。聖書を信仰によって読む者は、そこに、主イエスの癒し、慰め、ねぎらいの御言葉の数々を聞いて、又、新たな力を得るのです。ですから聖書の世界に、お疲れ様会は元々ありえないことなのです。

では、なんで、聖書の世界と、世俗の世界とでは、これほど違いがあるのでしょうか。それは、両者を支配している霊が、別々だからです。世俗の世界は「お疲れ様の霊」とでもいうべき霊に支配されていますが、聖書の世界は聖霊に支配されています。聖書は、聖霊に満たされた人々によって記されました。又、聖書を信仰によって読む私たちも、聖霊に満たされて、導かれていくのです。

両者を比較しますと、世俗では、わざわざ型にはまった忘年会をしなければ疲れが癒された気がしないのに対して、聖書を読むということは、一人でも出来ますし、また、大勢でもできることです。又、時と場所を選ばず、聖書を開いて、御言葉を聞けば、聖霊に満たされ、又新たな力が得られるという、将に、万能の神の業なのであります。私たち人間にとって、聖霊に満たされ、導かれることはとても大切で、又幸いなことです。

さて、今日の説教題は「あなたは私の子となる」ですが、これは、私達人間が、主イエスの子どもとなり、神の子とされるということです。私達が、神の子とされ、神と最も近しい間柄にされるということは、又、聖霊に満たされ、聖霊が働くことによって成し遂げられることです。

ローマの信徒への手紙8章 14節

神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。

今日のルカ福音書の箇所も、マリアが聖霊に満たされて、主のはしためとされ、やがては神の子とされるという出来事であります。

私たちは、先入観から、マリアこそ、聖霊に満ち満ちて生きて来た人だから、この個所にも聖霊に満たされたマリアのことが書いてある、と思いがちですが、この長くはないルカ福音書箇所を、よく読みますと、実は、マリアは最初から聖霊に満たされた人ではなかったということが分かります。この個所は、聖霊を知らなかったマリアのところに、聖霊がやって来て、マリアがそれを素直に信じて受け入れたので、マリアは主のはしためとされた、という出来事です。

では順を追ってみて参りましょう。

天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」

マリアは、この天使の挨拶を聞いて、戸惑い、考え込んだとありますが、旧約聖書を読みますとこの挨拶は、考え込むほどのことでもない普通の挨拶だとも言える言葉です。皆さん、シャロームという挨拶語をご存知かと思いますが、このユダヤ人が普段挨拶で使っている言葉には多様な意味合いがありまして、「あなたに平和があるように、あなたに繁栄があるように」などという意味です。マリアが聴いた「お目でとう」という挨拶も、このシャロームに近い挨拶語だとも受け取れます。又、「主があなたと共におられる」と言うのも旧約によく出て来ます挨拶語でもあります。例えば

ルツ記 2章 4節

ボアズがベツレヘムからやって来て、農夫たちに、「主があなたたちと共におられますように」と言うと、彼らも、「主があなたを祝福してくださいますように」と言った。

つまり、ボアズと農夫たちの間で、「主があなたたちと共におられますように」、「主があなたを祝福してくださいますように」という会話が、挨拶としてごく自然に取り交わされているのです。

ところが、マリアはそうではありませんでした。天使から「主があなたと共におられる」と挨拶されたところで、彼女は、ごく自然に「主があなたを祝福してくださいますように」と返すことができないで、考え込んでしまったというのです。これは、なぜなのでしょうか。マリアはこの時うつっぽかったのでしょうか。それは、分かりませんが、この時のマリアは聖霊に満たされては　いなかったのでしょう。ですから彼女は、この挨拶は何のことかと考え込んでしまったのだと思います。

天使は、ここでマリアが考え込んでしまうことを承知の上で、次々に驚くべきことを彼女に告げていきます。天使は、彼女の胎の中での御子イエスの誕生を予告し、そのイエスが神の子となると予告します。そして、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む、」と予告します。

エルサレムから遠く離れた、ナザレの町で、マリアは血統的にはダビデ家の末裔であるヨセフと婚約していたとはいえ、彼女は、さほど信仰熱心と言った訳でもなく、又、このナザレという町も、そんなに聖霊が満ち溢れた町ではなかったのかも知れません。マリアは身分が低い、主から見ても特に目をかけるような特徴もない人でした。

然し、イエス様の誕生と言う誠に良き知らせは、マリアのところへと知らされました。それはマリアが、どんな奇跡をも素直に信じて、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」という様に、素直に主の御心を信じる人だったからでした。

さて、私達クリスチャンも洗礼を受けて、聖霊を頂いて、神の子とされる道を歩んでいる者たちですけれども、このマリアと同じように、聖霊に導かれて、日々生活をしておられることと思います。クリスマスと言いますと、父マリアがいて、母ヨセフがいて、そして一人子イエスが生まれるという出来事を、現代の理想の家族像と重ね合わせて解釈するという仕方が、一つにはあります。しかし聖書が語る御子イエスの誕生は、決してそれだけにとどまる出来事ではないのです。独身であっても、父であっても、又、母であっても、子どもであっても、その一人ひとりが神様と直接結ばれて神の子とされるように、ということで、主なる神が正真正銘の神の子イエスをこの地に下されたという出来事がクリスマスなのです。ここのところがよく分かっていないと、クリスマスの大きな喜びを味わうことはできないでしょう。

そして、私達が神の子とされる、ということは今日の、マリアの身の上に起こった出来事に記されていますように、ただ主なる神の御心を受け入れるだけで良いのです。それは自分の努力とか、功績とか、才能とかによって得られることではないのです。

この説法は、プロテスタント教会で伝統的に言われてきた語り口でありますが、何か、現代人はいくらこの説法をしても引き寄せられないし、聞いてくれないのも事実だと思われます。

実は、プロテスタント教会を切り開いた、ルターやカルヴァンは、中世の教皇支配によるカトリック教会のあり方を嫌って、それより前の古代教会の教父たちに立ち返ろうとしました。ですからルターやカルヴァンはアウグスティヌス等の古代教父のことを良く知っていて、それをお手本にして、プロテスタント教会を立ち上げていったのでした。

そのアウグスティヌスが、私達が神の子とされるまでのステップを説いていますので次にご紹介します。ちょっと現代人に響きやすい言葉に変えています。

第一段階。彼は、善人や清い牧師たちの立ち居振る舞いにって生活し始める。

第二段階。彼は、外見上のことだけではなく、良い教えと、神の御心と、神の知恵に突き進み、人間に背中を向けて、神に顔を向け、母の膝よりはいだし、天にまします父に微笑みかける。

第三段階。彼はますます母より離れ、彼女の膝より遠ざかり、思い煩いを脱し、あたかも自ら何の心の動揺もなくなるようになる。なぜなら彼は神の愛に結ばれ、もっぱら神に近づき、そのうちに喜びと幸せを味わい、神に反する物事とは遠ざかるからである。

第４段階。彼はますます成長し、神の愛の中に根を生やし、常にあらゆる試練、誘惑、逆境を、いくら苦痛や苦難が伴おうが、ひたすら喜びをもって受け入れる用意ができている。

第５段階。彼は平和のうちに筆舌に尽くしがたい最高の知恵を豊かに受け入れ、静かに安らいつつ、いつどこででも、主と共に生きるようになる。

第６段階。彼は神の永遠性によって、見える物事を脱却して超越して、全き完全に入れられ、一切のはかなさや時間的生活を忘れ去って、神の似姿とひとしい者とされ、神の子とされる。これ以上の段階はない。ここに永遠の安らいと至福とが現前し、永遠の命が与えられる。（マイスターエックハルト「高貴なる人間について」）

まあ、このように、私達が神の子とされるに至る信仰の道を事細かに、段階を追って説明されますと、偽ることができずごまかすことができないのです。中には、強い母性愛をお持ちの方には、「彼は母の膝よりはいだし、天にまします父に微笑みかける。彼はますます母より離れ、彼女の膝より遠ざかり」といったくだりは受け入れがたくお感じになるかも知れません。

しかし、ご承知のように、キリストの愛は母性愛を否定するものでは有りません。むしろ、私達は先ず第一に自らをキリストの愛に委ねることで、それぞれの母性愛は強められていくことでしょう。

私達が、イエスキリストの御誕生という誠のクリスマスを喜び祝うためには、この世の長続きしない喜びとの葛藤が必ず伴います。マリアは、へりくだって、主なる神の御心に従い、御子イエスの人生を最後まで見守り続けるという、キリストの道を歩み始めました。このクリスマスのときに、多くの方々の上に聖霊が降り、多くの方々が、神の子とされる道を歩み始め、神の家族として迎え入れることができますよう、お祈りして参りましょう。

お祈り

父なる神よ

あなたは、この世を愛し、誰一人滅びることがないようにと願われています。その熱い思いを多くの人々が知り、このクリスマスに、御子イエスの御誕生を心から喜び祝うことが出来るようにして下さい。

御子イエスが、マリアの内に宿って下さったように、私達一人ひとりの内にも宿られ、私たちを御子と共に歩む者として下さいました。その大きな恵みに、感謝と賛美を捧げます。どうか私たちが最後まで、主と共に歩み、キリストが再び来られる時に、神の子として迎え入れられることが出来ますよう、日々の歩みを守り祝して下さい。

この世の闇の中で苦しむお一人お一人を、あなたが顧みて下さい。まことの光である御子イエスから全ての希望、喜び、幸せ、繁栄が湧き出ていることを知り、御子イエスを信じて生きる道へと招いて下さい。この世の絵にかいたような幸せや、繁栄はやがてすたれていくものです。どうか、あなたの誠の光によって、この世の闇を照らし、私たちをまことの幸いであるキリストと共に歩む道へと導いて下さい。

父と聖霊